



TITLE:

# 1770年代における清-カザフ関係-- 閉じゆく清朝の西北邊疆

AUTHOR(S):

小沼, 孝博

---

CITATION:

小沼, 孝博. 1770年代における清-カザフ関係--閉じゆく清朝の西北邊疆.  
東洋史研究 2010, 69(2): 348-315

ISSUE DATE:

2010-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/180038>

RIGHT:

# 1770 年代における清－カザフ関係

——閉じゆく清朝の西北辺疆——

小 沼 孝 博

は じ め に

第 1 章 カザフの入覲停止

第 2 章 1770 年代のカザフ草原南辺の情勢と清朝の対応

(1) カザフとクルグズとの抗争

(2) アブルフェイズのトルキスタン献納問題

(3) 不干渉の原則の確定

第 3 章 カザフ内附政策の停止とその背景

(1) カザフの越卡事件と卡倫管理体制の改革

(2) カザフ内附政策の停止

お わ り に

は じ め に

18 世紀中葉、天山山脈の南北一帯（新疆）を支配下に置いた清朝は、さらに西方のテュルク系ムスリム諸勢力と接触を持つに至る。その中で最も早く、且つ密接な関係を構築したのが、新疆北部（ジェンガリア）で清朝の領域と隣接していたカザフ遊牧勢力である。

筆者は前稿（Onuma 2010a<sup>(1)</sup>）において、カザフ中ジュズ最有力のスルタン（のちにハン<sup>(2)</sup>）であったアブライ（1711?-81）との交渉を事例に、1750 年代～1760 年代の清－カザフ関係を考察した。その中で筆者は、清朝が清朝皇帝を「エジ

(1) Onuma 2010a は、小沼 2006 に増補改訂を加えた英訳版である。以下、参照箇所を示す場合は、Onuma 2010a の該当頁数のみを記す。

(2) 本稿の史料引用部分では、言語・文字の別にしたがって「ハン」と「ハーン」を書き分けるが、本文中においては「ハン」に統一する。ただし、清朝が付与した爵位に意味を限定する場合は「汗」とする。

エン」(ejen)とし、中央アジア諸勢力をその「アルバト」(albatu)と措定する関係(以下、「エジェン－アルバト」関係)を軸に、関係構築を進めたことを明らかにした<sup>(3)</sup>。特に清－カザフ間では、この関係は清朝皇帝とカザフとの主従関係を表現する文言としてだけではなく、相互の主張や要求を正当化するための論拠に据えられ、カザフから清朝に送付された文書からもそれを確認できる。言い換えれば、「エジェン－アルバト」関係は、清朝とカザフの政治交渉における共有のツールとして機能を果たしていたといえる。

ただし、前稿での議論は清－カザフ関係の初期段階に時代を限定したものであった。では、この時期に構築された関係はその後どのように推移していくのであろうか。

従来の研究では、アブライとアムルサナの連合期(1755-56)には対立したが、1757年(乾隆22)のアブライの「帰順」以降、18世紀後半を通じて清朝とカザフは穏当な関係を維持した。そして19世紀前半に至ると、カザフ草原におけるロシアの影響力が強まり、清朝とカザフの関係は漸次切断されていく<sup>(4)</sup>、という理解が定着している(佐口1986: 434-435; 厲2004: 6-7)。このような理解は大枠として首肯できるものである。また、実録等の清朝官撰史料に収録されている清－カザフ関連の記事は時代を経るごとに減少し、その内容もカザフの「朝貢」や爵位承襲に関わる事件性の少ないものに収斂していく。清朝のカザフに対する関心が次第に低下していったことは事実であろう。では、カザフに対する関心低下の背後に、清朝の政策的・構造的変化というもの存在していなかったのだろうか。

19世紀前半、清朝はカザフを「卡外の藩籬」と見なし、「卡外」の諸勢力間の

(3) この「エジェン－アルバト」関係は、本来モンゴル遊牧社会に由来し、清朝が支配下のモンゴル系遊牧民との間に設定していたものであり、中央アジア諸勢力との対外的な関係にも敷衍された。なお、中央アジアの「テュルク・イスラーム世界」と関係を構築・維持していく中で、清朝が「イスラーム」という要素を、モンゴル・チベット支配の場におけるチベット仏教のように、支配正当化の政治思想として主体的に利用した形跡はほとんど見られない。この点については、Newby 2005: 42の議論も参照。

(4) 具体的な事例については、野田2006を参照。

対立には「天朝は原より問わざるべし」という不干渉の方針を貫いていた（小沼 2001: 69）。その方針はロシアの進出に際しても同様であり、カザフ首長層の清朝からの離心をまねく一因となった（野田 2005: 42-45）。かかる頑なな不干渉の姿勢は、18 世紀中葉に見られた外交姿勢、すなわち中央アジア諸勢力の間で発生した紛争に対し、どちらかに肩入れする形となる直接的介入は避けつつも、それら「アルバト」を統べる「エジェン」の立場を自認して和合を促していく姿勢（Onuma 2010a: 118-124）との間に一定の落差を見せている。このような対応の変化はいかなる経緯によって確定したのであろうか。

以上の点を念頭に置いた場合、先ず注目しなければならないのが 1770 年代の清－カザフ関係の「混乱」である。この混乱については、既に厲声がその一端を指摘しているが（厲 2003: 200-201）、本格的な検討や評価はなされていない。またこの混乱に先立つ事件として、1771 年（乾隆 36）のトルゲート部<sup>(5)</sup>の清朝への「帰順」も射程に収める必要があるだろう。トルゲート部の帰順に関しては豊富な研究蓄積があるが（宮脇 1991；馬・馬 1991: 153-204；Millward 2004 など）、それによって清朝の西北辺疆に生まれた新たな状況が、その後の清－カザフ関係に及ぼした影響を検証する作業はまったくなされていない。

そこで本稿では、1770 年代に清－カザフ間で発生した諸問題を詳しく検討し、それに清朝が対応していく過程で対カザフ政策にいかなる変化が生じたのかを明らかにする。論証においては、主に満洲語文書史料に依拠するが、カザフのスルタンが清朝に送付したテュルク語（チャガタイ語）文書の利用も試みる。なお、本稿で引用した史料中における〔 〕は筆者が補ったもの、（ ）は筆者の註記、……は中略である。

## 第 1 章 カザフの入観停止

本章では、カザフ草原東部のセミレチエ地方に所領（Tu. yurt～yurut, Ma.

(5) 帰順した集団の中にはホシヨト部などの他部族も含まれているが、本稿では煩瑣を避けるため「トルゲート部」とのみ記す。

nukte) を持っていたアブライとの関係に着目する。アブライは清朝から汗<sup>ハン</sup>爵を授けられており、後述の王爵を有するアブルフェイズと並んで、清朝と最も緊密な関係を築いた人物である。

清朝とカザフの関係を考察する上で、北京（或いは承德）への入観使節の派遣は一つの目安となる。1757 年のアブライの帰順以降、雪害が甚だしかった 1766 年（乾隆 31）を除いて、カザフは毎年入観使節を派遣していた。ところが、1769 年（乾隆 34）4 月以降、約 4 年にわたりカザフの入観は中断している<sup>(6)</sup>。これは、1770 年にヴォルガ河を渡り、カザフ草原を横断して、1771 年に新疆北部へ到達したトルグート部の動きの影響を受けたものと考えられる（厲 2003: 200）。当初清朝はトルグート部の東遷の意図をつかめず、西北辺疆では緊張が高まっていた。結果として武力衝突は起きず、トルグート部の清朝への平和的「帰順」がなった。しかし、むやみな混乱を避ける意図もあったのであろう。牧地の選定などの善後策がある程度進展するのを待ってからカザフの入観は再開された。1773 年（乾隆 38）、そして翌 1774 年（乾隆 39）に、アブライらが派遣した入観使節が到来している。

しかし、清朝とカザフの関係はそのまま正常化せず、使節派遣は再び中断する。1775 年（乾隆 40）、アブライはオトルチ=バートルを筆頭とする入観使節を清朝に派遣した。ところが、イリ將軍イレトゥ（Ma. Iletu, 伊勒図）は、彼らが携えてきたアブライのトド文字書簡の内容を問題視した。アブライはその書簡の中で、11 代にわたってアブライの一族が「貢賦」を徴収してきたというタシケントに言及し、その地の「三万戸の貢賦」を乾隆帝に献上することを申し出、その実現のために 1,000 兵の貸与を請うたのである<sup>(7)</sup>。

カザフ草原南辺に位置するタシケント<sup>(8)</sup>は歴史的にカザフが支配する都市で

(6) カザフ入観使節の到着時期や構成員については、Onuma 2010b: 156-159 を参照。以下、逐一註記しない。

(7) 「満文録副」2644. 30, 106: 2634-2635, 乾隆 40 年 8 月 20 日 [1775. 9. 14]、イレトゥの奏摺に収録されたアブライのイレトゥ宛文書の満文訳。

(8) ワリハーノフ（アブライの曾孫）は、アブライ一族が支配した都市をトルキスタンと述べているが（Valikhanov 1985: 111）、現在はタシケントとする説が有力である。

あり、アブライの祖父はその統治者であった。しかし、父ワリーの代にワリーが殺害され、13歳のアブライはステップへ逃避したといわれている (Valikhanov 1985: 111)。1750年代には、大ジュズのハンであるアビリスとウズベク人有力者である3人のホージャとの間でタシケントの支配をめぐる争いがあつたが<sup>(9)</sup>、いずれにせよ当時タシケントは「アブライの属下にはなかつた<sup>(10)</sup>」のである。ところが、1760年頃からアブライは、トルキスタンに拠っていた中ジュズのハンであり、トルキスタンからタシケントを経て新疆を結ぶ交易路の確保を目指すアブルマンベトの要請を受け、故地タシケントへの進出を開始した (野田 2002: 27)。アブライによる清朝への援兵要請に、このような背景が存在したことを考慮しておきたい。

ところで、アブライの清朝に対する援兵要請は、これが最初ではない。1765年 (乾隆 30) 以降、南下を目指すアブライらカザフ勢力は、北上を企図するコーカンド勢力と戦争状態に入っていた。その争奪地の一つがタシケントであり、アブライはコーカンドの統治者イルダナ=ビィ (或いはベク, r. 1758?-68/69?) と戦うためタシケントに1年間留まったといわれている<sup>(11)</sup>。その際にもアブライは、1767年 (乾隆 32) 派遣の使者ドゥラト=ケレイに書簡を託し、清朝に2万兵の援軍と大砲の貸与を申し出ていた。当時のイリ將軍アグイ (Ma. Agui, 阿桂) はこの要請を退け、乾隆帝は「アルバト」たるアブライとイルダナに対し、「エジェン」の立場から和合を促す勅諭を発した (Onuma 2010a: 118-124)。

この前例を把握していたイレトゥは、再度援兵を要請してきたアブライの狡猾さを強く非難した。また、タシケント付近にはクルグズ (キルギス、清朝史料では「ブルト」) が遊牧していることから、アブライの援兵要請には、タシケントだけでなくクルグズをも攻略せんとする思惑<sup>(12)</sup>があるに違いないと推測した。そしてイレトゥは以下のような文言を含む書簡をアブライに送付した。

汝が呈した書信にある、タシケントの地を大エジェンに献上するというこ

(9) 『欽定皇輿西域図志』巻 45: 9a-b; 佐口 1963: 275.

(10) 『欽定皇輿西域図志』巻 44: 9b.

(11) KRO: 685 (Doc., no. 268); 野田 2002: 27 (note 55).

(12) この時期におけるカザフとクルグズの抗争については第2章で論じる。

とは誤りである。汝らカザフ、そしてブルト・コーカンド・アンディジャン等の地の諸回子<sup>ムスリム</sup>たちは、みな大エジェンに頭をさしだして (Ma. ambajejen de uju alibume<sup>(13)</sup>) 従ったアルバトである。これらの土地はみな大エジェンの土地である。汝があらためてタシケントの地を献上するとは、いかなることか。査するに、ハン汝は以前タシケントの地を奪取しようとコーカンドのイルダナ=ベクと数年間戦った。しかも、ハン汝はドラト=ケレイらを遣わし、兵士・大砲・鳥鎗を請うために何度か来たのを、我々はすべて退け返らせていた。しかも大エジェンが英鑑されて、かつ教旨を下している。いま、ハン汝が再び画策を始め、素知らぬふりで「タシケントの地を大エジェンに献上したい」と告げ、兵丁を請うべく人を遣したことは大きな誤りである。汝らカザフは大エジェンのアルバト、汝らカザフの土地は大エジェンの土地であるぞ。大エジェンが旧来どおり汝らに与え遊牧させているというのに、汝らが戦争して奪った土地を大エジェンに献上するという道理があろうか<sup>(14)</sup>。

1767年の支援要請への対応と同様に、「エジェン-アルバト関係」を強く意識した外交姿勢をとっている。さらにイレトゥは、アブライからの書簡と貢馬<sup>(15)</sup>を受け取らず、オトルチらの入覲を拒否し、アブライのもとに帰還させた。

翌年10月、再びオトルチを筆頭とする入覲使節がイリに到来した。この年イレトゥは、乾隆帝到北京で拝謁するため6月からイリを離れており、代わりにウルムチ都統であったソノムツェリン (Ma. Sonomcering, 索諾木策凌) がイリに赴き將軍職を署理していた。オトルチが携えてきたアブライの乾隆帝宛書簡

(13) 清朝皇帝への服従の意を示す文言であると考えられる。1795年(乾隆60)に清朝に届いた、コーカンドのナルバタ=ビイ(1768/69?-1798/99)名義のテュルク語文書には、“Biz İrdāna bī bābāmız uluġ hānga baš tutup”(我らの祖イルダナ=ビイが大ハーンに頭をさしだして)という一文が見られる。「満文録副」3514. 11, 160: 3568-3570, 乾隆60年10月包。

(14) 註7,「満文録副」106: 2646-2648, イレトゥの奏摺に添付されたアブライ宛文書の満文草稿。

(15) カザフの使者は、イリ・タルバガタイにおいて「貢馬」(Ma. belek morin)を献上するのが慣例となっていた(Noda and Onuma 2010: 28-33)。カシュガルにおけるクルグズの貢馬献上については、Di Cosmo 2003: 359-362を参照。

には、次のような奇妙な内容が記されていた。

大エジェンに対し、アブライ=ハンが平安を請うため書信を呈しました。大エジェンの金顔を毎年仰ぎ見たいと思っています。我の地は僻遠ゆえ、昨年送った者は途中で帰ってきました。今年は平安を請うため送っています。以前、白帽 (Ma. šayan mahala) <sup>(16)</sup> を大エジェンの黄金の裾 (Ma. aisin buten) <sup>(17)</sup> に献上して従いました。我々の経書 (Ma. nomun) に、「白帽たちは<sup>マンジュ</sup>満洲によってメッカ方面に追いやられる」と記してあります。我々カザフのタイジの子孫、我々カザフの部民 (Ma. nukte) は、その白帽〔の者〕が敗走する時にも敗走せず、命ある限りこの地から動きません。死した骸を骸にあわせ (Ma. bacehe giran be giran de acabume)、永久に大エジェンの黄金の裾から離れずにいたいのです。〔我々の意志が〕いかに堅固であるかを皇上より聖鑑いただきたい<sup>(18)</sup>。

意味をはかりかねたソノムツェリンがオトルチに尋ねると、アブライは昨年入覲を拒否され、さらにカザフのアホンから、カザフとクルグズが「<sup>マンジュ</sup>満洲」によって駆逐されるという予言を聞き、清朝との関係が疎遠になることに不安を抱いているとのことであった。ソノムツェリンは、カザフが恭順であり続ける限りそのようなことはないと説き、彼らの入覲を認めて北京へ出立させた。なお、北京への途上、オトルチ一行はハミでイリに戻る途中のイレトゥと遭遇している。オトルチはイレトゥにも、上記史料と同様の言葉でアブライの不安を代弁

(16) 「白帽」が意味する具体的対象は明確でないが、アブライから乾隆帝に献上されていることを勘案すると、1762年(乾隆27)にアブライの使者として入覲し、その後家族とともにイリに移住したウメル (Ma. Ūmer, 烏默爾) たちを指すかもしれない。清朝は彼らの移住を自発的なものと認識しているが(『哈薩克名冊』6b)、アブライは「我の義父ウメルと〔彼の弟〕シレンベト (Ma. Sirengbet) の30人の家族と家畜を悉く献上した」(註7, 『滿文録副』106: 2634)と述べている。ハフィゾバもウメルらを「人質」と見なしている (Khafizova 1995: 181-182)。いずれにせよ、後述のように、「白帽」の駆逐はカザフやクルグズの駆逐を暗に意味している。カザフやクルグズは、伝統的にフェルト製の白い帽子 (aq qalpaq) を被っている者が多い。

(17) カザフが清朝に送付したテュルク語文書に見られる “altün/altun etäk” に対応するものであろう (Noda and Onuma 2010: 41-42)。

(18) 『滿文録副』2697. 41, 110: 666-677, 乾隆41年9月19日 [1776. 10. 30], ソノムツェリンの奏摺に引用されたアブライの乾隆帝宛文書の満文訳。



した。イレトゥは清朝側にカザフ駆逐の意図がないことを力説している<sup>(19)</sup>。

ところが、北京に到着したオトルチは、隠し持っていた前年のタシケントの問題に関わる書簡を乾隆帝に献呈しようとした。これを知った乾隆帝はアブライに対する不信感をあらわにし、謁見時にオトルチを面責した。またイリ將軍職に復帰したイレトゥに対して、アブライには今後さらなる注意を以て対応するように上諭を下した<sup>(20)</sup>。

ことの次第を知ったイレトゥは、自分がイリから離れている隙をついてアブライが使節を派遣してきたと断じた。イレトゥは上諭を複写してタルバガタイ参贊大臣キングイ (Ma. Kinggui, 慶桂) にも送付し、問題意識の共有を図っている<sup>(21)</sup>。そして、太上皇太后の死去 (1777 年 2 月) による喪中期間と重なったこともあり、カザフの入観は再び停止されたのである<sup>(22)</sup>。

その後、カザフから入観使節が派遣されないまま約 2 年間が過ぎた。1779 年 6 月、イレトゥはカザフの現状を把握するため、イリに家畜を売りに来たカザフ人<sup>(23)</sup>などからの情報収集を試みた。その中で注目されたのが、タシケント出身の商人バーバー=ホージャの証言である。すなわち、2 年前に彼がタシケントにいた際、アブライのもとからオトルチが派遣されてきた。その時オトルチはタシケントの人々に、清朝皇帝が「タシケントの貢賦をアブライに与えるようにと勅諭を下した」と述べ、朱印の捺された黄色い紙の文書を見せた。タシケントの「ベク」(長)であったホージャム=バタシャン (Ma. Hojim Batašan) はアブライの偽称を見抜き、計略を以てオトルチを帰還させ、残留した彼の息子を殺害したという<sup>(24)</sup>。

(19) 「満文録副」2701. 32, 110: 1756-1762, 乾隆 41 年 11 月 6 日 [1776. 12. 16], イレトゥの奏摺。

(20) 「満文録副」2714. 13, 111: 1414-1421, 乾隆 42 年 3 月 16 日 [1777. 4. 23], イレトゥの奏摺に引用された乾隆 42 年 1 月 10 日 [1777. 2. 17] の上諭。

(21) 同上, 「満文録副」111: 1414-1421, イレトゥの奏摺。

(22) 「満文録副」2714. 10, 111: 1399-1403, 乾隆 42 年 3 月 16 日 [1777. 4. 23], イレトゥの奏摺。太上皇太后の死去により、新疆のトルゲート・ホショト部、及びクルグズ・コーカンドの入観も停止された。

(23) イリにおける清朝とカザフとの絹馬貿易については以下の諸文献を参照。佐口 1963: 303-339; 林・王 1991: 131-430; Millward 1992.

(24) 「満文録副」1792. 20, 116: 1728-1730, 乾隆 44 年 5 月 6 日 [1779. 6. 19], イレトゥ

ことの真偽は不明だが、清朝側の意向を無視し、タシケントの支配を狙うアブライの態度、および勅書の偽造（或いは内容の偽称）は許しがたいものであった。イレトゥは「アブライの性格は極めて奸悪・狡猾である」と非難し、今後アブライがタシケント獲得の策略のために使者を派遣してくることがあれば、ただちに送り返すという方針を示し、乾隆帝もその方針に賛意を示した<sup>(25)</sup>。同年夏、アブライは娘婿のダイル<sup>(26)</sup>をイリに派遣し、年内にアブライの子弟に率いさせた入観使節を派遣したいと申し出た。しかし、ダイルが重ねて懇願したにもかかわらず、イレトゥはその要請を断っている。その理由は、使節のイリ到着時期が冬にさしかかるというものだったが<sup>(27)</sup>、上述のようなアブライへの不信感も、このような判断が下された一つの要因であったと考えられる。

ところが1780年初頭、アブライの息子セデクを筆頭とする使節がイリに到着した。セデクはダイルの帰着前にアブライに出発を命じられ、途上でダイルに遭遇したが、そのまま前進してきたのであった。北京に送るには時期が遅かったが、再度往復させると多くの家畜を失うであろうこと、セデクがまだ16歳の若者であること考慮し、イレトゥは彼らをイリで越冬させた後に北京へ出立させることにした<sup>(28)</sup>。ところが、またもやアブライの書簡には、昨年夏にアブライを襲撃したカラケセク=オトク<sup>(29)</sup>のバクボロトを討つために兵丁500~600名を借用したいという請願が記されていた。これにイレトゥは次のように対処した。

臣が思うに、これはカザフ内部の事情に係わるため、我が兵〔の貸与〕はあずかり聞くことができない。ゆえに、「汝の父はカザフの汗である。なすことが道理に適っていれば、属下の者は自ずと服従するものである。も

の奏摺：『高宗実録』巻1084：1a-2a、乾隆44年6月癸丑（1日）[1779. 7. 13] 条。

(25) 同上、「満文録副」116：1730-1731、イレトゥの奏摺。

(26) 大ジュズのバラクの息子で、アブルフェイズの養子となっていたハーンホー ज्याの異母兄にあたる。

(27) 「満文録副」2814. 13, 117：3020-3021、乾隆45年1月3日[1780. 2. 7]、イレトゥの奏摺。

(28) 同上、「満文録副」117：3021-3025、イレトゥの奏摺。

(29) 清朝史料では、ジュズの下位集団を「オトク」(Ma. otok, 鄂拓克 < Mo. otuy) と記すことが多い。

しも抵抗があれば、適宜その罪を罰するべきである。いま兵丁を借りたいと願うのは道理に合っておらず、おそらく汝らに裨益しないであろう。〔乾隆帝には〕転奏できない」と諭すよう述べた<sup>(30)</sup>。

乾隆帝もこの対処は適切であると評価し、またセデクが北京到着後に軍機大臣に同じ請願をしても、既決の方針にしたがってそれを却下すればよいと述べるのみであった<sup>(31)</sup>。度重なる援兵要請を受けてきた清朝は、もはやそれを意に介さず、また「エジェン」と「アルバト」との関係を説きつつカザフの内情に容喙する姿勢も見せなかったのである。なお、イリで越冬したセデク一行は1780年（乾隆45）6月に無事入観を果たした<sup>(32)</sup>。

以上に論じたように、カザフの帰順以降、ほぼ毎年入観使節を受け入れていた清朝であったが、1770年代に入るとトルグート部の帰順、度重なるカザフからの援兵要請、さらには勅書偽造などが続き、カザフの入観は度々中断されたのである。

1781年（乾隆46）、アブライは死去した。先行研究が明らかにしているように、その汗爵継承をめぐり長子ワリーと娘婿ダイルが争いを起こし、アブライの死後も混乱は継続した（阿拉騰奥其爾・呉1998；Noda 2010: 140-142）。結局ワリーが汗爵を継承するが、1年1貢のペースはついに回復することなく、清朝との関係は年を追うごとに疎遠になっていく。

## 第2章 1770年代のカザフ草原南辺の情勢と清朝の対応

前章で論じたように、清朝がカザフの入観を却下した最大の原因は、アブライからの援兵要請であった。では、その要請の背景にはいかなる問題が存在しているのであろうか。本章では1770年代のカザフ草原南辺の情勢とそれに対する清朝の対応について論じ、別の角度から当時の清－カザフ関係を検討してみたい。

(30) 『高宗実録』巻1099: 7a-b, 乾隆45年正月甲辰（25日）[1780. 2. 29] 条。

(31) 「満文寄信檔」135（4）, 乾隆45年正月25日 [1780. 2. 29] 条。

(32) 『高宗実録』巻1106: 9b, 乾隆45年5月壬午（4日）[1780. 6. 6] 条。

## (1) カザフとクルグズとの抗争

カザフとクルグズは、ともにテュルク系の遊牧民であり、17世紀後半からジューンガルの圧迫によりカザフは西北方面へ、クルグズは東南方面への移動を余儀なくされていた。ところが、清軍の攻撃によるジューンガルの滅亡とオイラトの人口減少により、彼らは旧遊牧地回復の動きを見せた。両勢力の交錯するカザフ草原南辺では牧地争いが頻発し、1775年前後からその情報がイリやタルバガタイの清朝駐防官のもとに届き注意を引いた。

1774年、アブライとアブルフェイズは、イリに使臣を派遣してクルグズの攻撃による被害を報告し、来援を要請した。これに対して乾隆帝は、1767年にカザフとコーカンドとの紛争に対処した時と同じように、カザフとクルグズという自らの「アルバト」に対して、彼らの「エジェン」という立場から和合を促した<sup>33</sup>。しかしその後、今度はカザフがクルグズを攻撃し千人以上を捕獲したという知らせが届いた<sup>34</sup>。

1775年、アブルフェイズはタルバガタイに第三子のボブを派遣してきた。参贊大臣キングイがカザフとクルグズの現状を尋ねると、ボブたちは「現在アブライ・アブルフェイズはどちらもそれぞれの牧地にいる。ブルトとも非常に仲がよい<sup>35</sup>」と返答した。また、ボブが携えて来たアブルフェイズのイリ將軍宛のテュルク語書簡の中で、昨年来の対立の事情が説明されていた。以下、ローマ字転写のテキストと訳文を提示する。

## 【テキスト】

/10/ ... Men özüm ata yurtığa bargan[i]lmıda, Qırğız çät /11/ ildin yulqı  
aldı. Aqä Hān Hwāja törä, Baraq batur törüt mün kişi birlän /12/

(33) 『高宗実録』巻953, 1b-2b, 乾隆39年2月庚子(17日) [1774. 3. 28] 条; Onuma 2010a: 123.

(34) 『高宗実録』巻958, 18a-2b, 乾隆39年5月丁卯(23日) [1774. 6. 23] 条。

(35) 『満文録副』2636. 13, 106: 720, 乾隆40年6月2日 [1775. 6. 29], キングイ等の奏摺, 附件。

barğan ikän. Qırğız, “Il bolaman. Aq öyli<sup>(36)</sup> berämän.” dep Qazāqnı on yettä kün /13/ qondurup, qayta bölüp alıpdur. Teḡi qayta kelip, Jāfrāṣı digän ilni /14/ olja YSYR<sup>(37)</sup> qılıp, alıp ketipdür. Andın Ablay ḡän, men birgä ikki tümän kişi bolup, /15/ törüt mıḡ kişini alduq. Elçi kelgändin soḡ, “Il bolaman. Aq öyli berämän.” /16/ dep elçi keldi edi. “Birimiz Qırğız, Qazāq ezen ḡänniḡ albutı. Biz /17/ ḡüb bilür.” dep, “Biri tüşkän kişini ber.” qararın dep yibärdük. Qırğız biz- /18/ niḡ kişini bu dämgiçä yibärmäydür. Kelgäni ḡäm bar. Kelmäḡäni ḡäm bar...

【訳文】

私が父のユルトに行っていた時に<sup>(38)</sup>、クルグズが境界の部民から馬を奪いました。それに対し、ハーンホージャ=トゥラとバラク=バートルは四千人とともに〔報復しに〕行きました。クルグズは、「降参します。〔奪った〕人々を返します。」といって、〔四千人の〕カザフを17日間留め置き、再び分け捕えられました。さらに再び来てジャフラシという部民を鹵獲していききました。その後、アブライ=ハーンと私はともに二万人を率いて、四千人を奪いました。〔クルグズの〕使者が来て、「降参します。人々を返します。」といいました。「我々クルグズとカザフは互いにエジェン=ハーンのアルバトだ。我々は仲良くしよう。」といい、「互いに捕らえた人々を返せ」と決定を述べて、〔捕虜を〕送還しました。クルグズは、私たちの人々この間に〔すべて〕返していません。来た者もいますし、来ていない者もいます<sup>(39)</sup>。あくまでカザフ側の言い分だが、最初にクルグズが攻撃をしかけ、それにカザフが応戦し、その後略奪捕虜の相互返還を取り決めて休戦になる、という展開をたどっている。イリ將軍イレトゥは、アブルフェイズへの返書の中で、今回

(36) “aq öy” (白い家)は「遊牧民のテント」を意味するが (Jarring 1964: 24)、ここではクルグズが奪ったカザフの人々を指していると考えられる。

(37) 語義不明だが、文脈から“olja” (捕虜、鹵獲品)と同義の言葉と推測される。

(38) アブルフェイズは1773-74年に、父アブルマンベト (d. 1769)の旧所領に滞在していた (Noda and Onuma 2010: 31-33 (Document E))。

(39) 「満文録副」2636. 13, 106: 1015, 乾隆40年6月15日 [1775. 7. 12], イレトゥの奏摺、附件。

の和合と捕虜返還を高く評価した<sup>(40)</sup>。

ところが、ボプが帰って行ってから4ヶ月後の11月、アブルフェイズの次子ジョチが派遣されてきた。イレトゥが到来の理由をジョチに尋ねると、ジョチはアブルフェイズからの2通の文書（以下、書簡A<sup>(41)</sup>、書簡B<sup>(42)</sup>）をイレトゥに手わたした。ここでは先ず、書簡Aのテキストと訳文を示す。なお、□で囲んだ文字は書簡に捺された印章の印文である。

【テキスト】

/1/ Yuqarı boğda ezen hānniñ /2/ esānlikini tilāymiz, köp yilılarga (sic.) /3/ Ilā qurba<sup>(43)</sup> sında boğda ezen hānniñ hizmatlariniñ qılıp /4/ turğan janjuñ, ambunlarga Abū al-Fayz wañdın du‘ā-i salām. /5/ Salāmdin soñ, söz bu kim, yuqarı boğda ezen hānğa bir fijik<sup>(44)</sup> uşladım. Şol /6/ fijikni yaḥşı sözlärni aytıp hānğa bilindürgäysiz. Wä yenä hāndin yarlıg /7/ alıp beriniz dep sizgä ma‘lüm qıldım. Siyir yilida atam Abū al-Muḥammad hānğa /8/ öldi dep yuqarı haṭ uşlap, hānğa bilindürgändä, Oba ambunı /9/ yibärip ülkän qayran qılğanda, andin beri quwanıp yürür erdim. /10/ Turkistān iliniñ öz arasında ança ağı bolmay<sup>(45)</sup> yüriydür. Şunıñ hānğa /11/ bir fijik uşlap, yurtğa bir elçi qayranlasañız, yurtniñ tili tāt- /12/ tākni yetülürğa sawāb bolur edi. Wä yenä janjuñ, ambunlarga yurt- /13/ niñarız bu kim, Qırğız il bolup turubmız, yenä hām bolsa, il oğrı, ütrükni /14/ qoymaydur. Ikki yurtniñ arasığa qarawul salayın dep ihtiyār qıldım. Bu

(40) 同上, 「満文録副」106: 987, イレトゥ等の奏摺に添付されたアブルフェイズ宛文書の満文草稿。

(41) 「満文録副」2654. 20. 1, 109: 973-974, 乾隆40年10月21日 [1775. 11. 14], イレトゥの奏摺, 附件。

(42) 同上, 「満文録副」109: 975, イレトゥの奏摺, 附件。なお、書簡A・Bの解釈において、デューセン・イル氏から有益な示唆を賜った。特に記して謝意を表したい。

(43) 語義不明。ただし、モンゴル語 “küriy-e” (居住地, 兵營, 城塞) の音写 “qurya” の誤記という可能性を指摘しておく。

(44) モンゴル語 “bičig” (文書) の音写。

(45) “aq bolmay” (平安でない) と思われる。

qara- /15/ wul Qaratalnıñ boyında qarawul salıp, sizniñ kişiñiz  
kelgünčä men /16/ bir qarawul qoyın dep sizgä ma'lüm qılaman. Bu  
yer Ayagüzdin beri sizniñ. /17/ Anıñ üçün sizdin yarlıq sorayman. /  
18/ Aqrab aynıñ altısı küni bitildi. /19/ Abū al-Fayz wañdın bir at  
beläk, Yöji (sic.) goñdın bir at beläk. Abū al-Fayz Bahādur sultān

# 【訳文】

至上なるボグダ=エジェン=ハーンの安寧を祈念すること，長年にわたって  
おります。イリ軍営において，ボグダ=エジェン=ハーンの職務を遂行して  
いる将軍と大臣に，アブルフェイズ王よりご挨拶申し上げます。ご挨拶の  
後，用件は以下の如しです。ボグダ=エジェン=ハーンに一通の書簡をおわ  
たしします。の書簡〔の内容〕をよき言葉を述べてハーンにお知らせいた  
だきますように。また，ハーンから勅諭をいただいて〔私に〕お与えくだ  
さい，とあなたにお伝えします。丑年（1769年）に父アブルマンベト=ハーン  
が亡くなったという丁重なる書簡を届け，〔父の死を〕ハーンにお知らせ  
した時，オバ<sup>アンバン</sup><sup>(46)</sup> 殿をお遣わしになり，恩恵を賜りまして以来，私はずっと  
喜んでおります。トルキスタンの人々との関係はあまり友好的ではありません。  
よって，ハーンに一通の書簡をおわたしするので，ユルトにだれか  
使者を遣わしていただければ，ユルトの無知蒙昧なる輩に至るまで功德が  
ありましょう。また，将軍と大臣に対するユルトの願望は以下の如しです。  
クルグズと仲良くしていますが，ただその人々は盗みや嘘をやめません。  
二つのユルトの間にカ倫を設けることを選びます。このカ倫はハラタラの  
こちら側に設けるのですが，あなたの方の人が来てから私は一つのカ倫を置  
きたいということをあなたにお伝えします。この地はアヤグズからあなた  
のものです。このため，あなたから勅諭を求めるのです。この書簡を蠟月  
（8月）6日に書きました。アブルフェイズ王より貢馬一頭，ジョチ公より  
貢馬一頭〔を献上します〕。

(46) “Oba” (وبا) と綴られているが，アブルマンベトの死去に際して清朝から派遣さ  
れた副都統オジン (Ma. Ojin, 鄂津) を指すと考えられる。『高宗実録』巻 844, 27a-b,  
乾隆 34 年 10 月乙卯（7 日）[1769. 11. 4] 条。

文書中段にあるトルキスタンの問題については後述する。後段でアブルフェイズは、クルグズとの関係は良好であると述べながらも、今後の被害防止策として清朝にカ倫 (Ma. karun) の設置を求めた。やや唐突の感があったが、イレトゥが調べたところ、以前 (1769 年 1 月か 1773 年 2 月) ジョチが入観した際、領侍衛内大臣フルンガ (Ma. Fulungga, 福隆安) の提言にもとづき、カザフとクルグズが良好な関係を維持し事件の発生を未然に防ぐための方策として、カ倫の設置を促す上諭が下されていた<sup>(47)</sup>。

この上諭が存在したため、清朝側の対応には苦慮が見られる。最終的にイレトゥは、クルグズの侵入を防ぐためのカ倫設置自体は理解できるとしながらも、清朝からの人員派出には触れず、「必ずしもハラタルなどの地にカ倫を設置する必要はない。ただ汝らの牧地の縁辺に設けるように」と、カ倫設置をカザフの裁量に委ねるような曖昧な返事をするにとどめた。以後、前章で論じたアブライのタシケント献納問題や、次章で論じるカザフの越卡事件などが重なったためか、カ倫設置の議論はうやむやのうちに流れてしまった。

## (2) アブルフェイズのトルキスタン献納問題

続いて書簡 B を検討する。その主な内容は、以下に示すように、書簡 A でも触れられていたトルキスタン (城) に関わるものであった。

### 【テキスト】

/1/ Yuqarī boğda ezen hānnıñ esānlikini tiläymiz, /2/ köp yilılargā (sic). Ülkān atamiz öldi. Emdikā hār ne dād'arzmiz bolsa, boğda ezen /3/ hāngā ma'lūm qılamiz. Ešim hān, Jahāngır hān, Tāwkā hān, Fūlāt hān, /4/ atam Abū al-Muḥammad hān ötüpdür, nečā atababamgā ötüpdür, Turkistān degān yurtğa /5/ hān bolup ötüpdür. Bizlärniñ waqt[ı]mızda unıñā ağa-inimiz yurt- /6/ nı üläšip alaman dep yüridür. Burun yurtqa daḥlī yoq kišilär emdi /7/ alaman dep yüridür. Burun atamiz birdä bolsa, yurt-wilāyat biz- /8/ lārniñ qolamızda edi.

(47) 註 41, 「満文録副」109: 966-967, イレトゥの奏摺。



Bizlārgä aġa-inimizdin, yakä unijä yaqdīn /9/ dušman bolsa, awwal ħudā, andīn soŋ'arž hār dādīmġa yetārgä umīd- /10/ wārman. Hār zamān bu sözlārimizni pādšāhġa yetk ü[r] almaymiz. Siz /11/ janjuŋ bu'aržimnī yuqarī boġda ezen hānġa yetkürgäysiz. Bizlārgä yarlıġ /12/ alip berin dep bitildi. Bu ħaṭ'aqrab ayniġ altī künī bitildi.

Abū al-Fayṣ Bahādur sulṭān

【訳文】

至上なるボグダ=エジェン=ハーンの安寧を祈念すること、長年にわたって  
おります。偉大なる父（アブルマンベト）は亡くなりました。これからはい  
かなる正義を申し立てるとしても、ボグダ=エジェン=ハーンにお伝えしま  
す。エシム=ハーン、ジャンギル=ハーン、タウケ=ハーン、ボラト=ハーン、  
父アブルマンベト=ハーンを経て、幾人もの先祖〔の時代〕にわたって、ト  
ルキスタンというユルトにおいてハーンとなっておりました。〔ところが〕  
我々の時代となり、それに対して我々の兄弟がユルト（トルキスタン）を分  
けて取ろうといっています。以前はユルトに関係なかった者たちが、今で  
は取ろうといっているのです。以前に父が一人で〔統治していたので〕あ  
れば、その地方は我らのものです。我らに対し、兄弟たち或いは他の方面  
から敵対されたならば、先ず神、次いで申し立てが我が正義に至ることを  
望んでおります。いつも私の言葉を <sup>パードシャー</sup> 皇帝 にお届けすることはできません。  
將軍たるあなたが、この要求を至上なるボグダ=エジェン=ハーンにお届け  
になりますように。我々のために勅諭をいただいてお与えください、と書  
きました。この書簡を蠟月（8月）6日に書きました。

書簡 B は、トルキスタンの支配をめぐるカザフ内部での抗争について、イリ將  
軍を通じて乾隆帝に裁定を要請したものである。それによれば、アブルマンベ  
トの死後、トルキスタンの支配権奪取を狙う対抗勢力の動きが見られるよう  
になった。アブルフェイズは、エシムから父アブルマンベトに到るまでの歴代ハ  
ンによるトルキスタン支配の歴史を述べ、自身の家系による支配の正当性を主  
張している。そして、乾隆帝から勅諭を与えてもらうことで、それにお墨付き  
を得ようとしたのである。

トルキスタン（旧名ヤス）は、しばしば「カザフ＝ハン国」の「国都」と見なされる。さらに、高名なスーフィーであるアフマド＝ヤサウィー（d. 1166/7）の埋葬地として神聖視され、カザフの歴代ハンの墓廟もこの地に建設された（野田 2007）。しかし 17-18 世紀においては、カザフの分裂<sup>(48)</sup>、ジュンガルの侵攻、定住ウズベク勢力の北上により、カザフのハンの権力は漸次縮小していった。確かにアブルマンベトはトルキスタンを居所としていたが、各ジュズの政治に対する影響力は持ち合わせておらず、中ジュズ内においてもアブライ・アブルフェイズら有力スルタンはそれぞれ独立して行動していた（Gurevich 1979: 62）。また、書簡 B の内容に関するイレトゥからの質問に対してジョチも、

我々のカザフの地にトルキスタンという城がある。元々はセメケ＝ハン<sup>(49)</sup>とアブルマンベト＝ハンが貢賦を分けて取っていた。またカルナクという小城があり、アブルマンベトが一人で貢賦を取っていた。いまセメケ＝ハンの子エセムはこのカルナク城を占領したいと言っている。我が父アブルフェイズは、将軍に請うて大エジェンに上奏してもらい、その城に使臣が派遣されれば、その地の人衆は平安を得られる〔と考えている〕<sup>(50)</sup>。

と述べ、アブルマンベトのトルキスタンにおける支配権力が本来独占的ではなかったこと、しかも争点はむしろオトラル北方の小城カルナクであり、そのための支援要請が今回の目的であると暴露している。イレトゥは、エセムがアブルマンベト家の近親であることを確認すると、ジョチに向かって次のように述べた。

エセムが恭順なる汝らの一族ならば、〔これは〕汝ら内部の事件である。我々は元々の事情を知らないのだから、汝らに代わり関与して対処してもうまくいかない。どうして大エジェンに上奏して使臣を遣わすことができようか。汝らはこのことを、汝らの間で相談して処理すべきである。さもなければ、

(48) 大・中・小の三つのジュズに別れるだけでなく、各ジュズに 2～3 人のハンが分立する状況が生じていた。

(49) セメケ（d. 1733）は中ジュズの前ハンであり、アブルマンベトの伯父にあたる。

(50) 「満文録副」2654. 20. 1, 109: 963-964, 乾隆 40 年 10 月 21 日 [1775. 11. 13], イレトゥの奏摺。

アブライに相談して処理すべきである<sup>51)</sup>。

これに対してジョチは、アブライはこの事情を承知しており、さらに彼もトルキスタンの地を狙っている一人である、と返答した。するとイレトゥは、アブライに続くアブルフェイズからの支援・介入要請を次のように分析した。

先ごろ、アブライのもとからオトルチらが遣わされて兵丁を請い、タシケントの地を大エジェンに献上したいと請いに来たのを、アブルフェイズが聞いていなかったということはあるまい。[しかし] 奴才のところから[オトルチらが] 退けられた事情を知らず、彼（アブルフェイズ）は「アブライがトルキスタンの地を献上するのではあるまいか」と懷疑し、彼の子ジョチを遣わしたのだ。或いは彼らの間は本当に不和であり、互いに争っているのかもしれない。[いずれにせよ] 我々が彼らの事情に関与する例規はない。ただちに「要請を」退けるべきである<sup>52)</sup>。

この見解をジョチにぶつけたところ、ジョチは回答に窮し、しばらく時間をおいた後に「アブライが人を遣わしたことをまったく聞いていなかった」とつぶやくのみであったという。

### (3) 不干渉の原則の確定

アブルフェイズのトルキスタン献納問題への清朝の対応において注目されるのは、清朝側がカザフの内情への不干渉をこれまでになく率直に示したことである。同様のことは前章で論じたアブライの援兵要請への対応の変化からも看取できるが、以下においてトルキスタン問題に関わる後日談からそれを確認してみたい。

1779年、アブルフェイズが昨年秋に兄ボロトのもとに行ったまま帰還してないという噂がイリに伝わった。イレトゥが情報を収集したところ、アブルマンベトの死後、ハン位を継承したボロトがトルキスタンから徴収している貢賦を、エセン（Ma. Esen = エセム？）が奪おうと企んだため、アブルフェイズはこれに

51) 同上、「満文録副」109:964、イレトゥの奏摺。

52) 同上、「満文録副」109:964-965、イレトゥの奏摺。

対抗すべく兄のもとに出向いていたが、現在は自らの牧地に帰還したとのことであった。これに対するイレトゥの反応は注目される。

アブルフェイズが〔ボロトのもとに〕出向いて、いま帰ってきたことから判断するに、この事件は彼らの間で解決し終わったのではあるまいか。もしも彼らの間で解決できなければ、アブルフェイズはまたイリに人を遣わして、〔我々に解決を〕求めに来るかもしれない。これは彼らの間における不和の事件である。我々にとってまったく妨げあることなく、むしろ諸事に有益である。我々が関与する必要はないので、もしも彼らが人を遣わして告げに来て、奴才はまた以前処理したように彼らを退け返ささるべく述べて〔牧地に〕送り返したい<sup>53</sup>。

ここからは、カザフの内情への不干渉の方針が踏襲されていることがわかる。さらに注目すべきは、カザフの内部抗争は清朝にとって好都合であると判断していることである。すなわち、18世紀中葉に関係を構築して以来、清朝は中央アジア諸勢力間の紛争に際して互いの和合を促してきたが、その外交姿勢を清朝は放棄しているのである。19世紀前半にロシアのカザフ併吞を黙認し、カザフ首長層の離心をまねくことになる清朝の対外的不干渉の原則は、1770年代の清－カザフ関係の混乱の中で確定したものであった。

### 第3章 カザフ内附政策の停止とその背景

清朝は西北辺疆に卡倫の設置による「卡内」・「卡外」という領域区分の概念を持ち込んだ。卡倫の設置は、モンゴルにおける牧地の境界画定とともに、遊牧社会に対する「属地主義」の導入を象徴するものである（堀 1995: 307-308）。ただし同時に、清朝は属人的な「エジェン－アルバト」関係を中央アジア諸勢力にも敷衍させたため、卡倫の内外に位置する各勢力がともに清朝皇帝の「アルバト」という立場にあり、理念的には区別されていないという矛盾が生じていた。そして実際に、清朝皇帝の「アルバト」という立場を根拠に卡内への移

<sup>53</sup> 「満文録副」2792. 40, 116: 2131-2132, 乾隆44年5月16日 [1779. 6. 29], イレトゥの奏摺。

住を希望するカザフ人が存在し、清朝も内附を容認していた。当時の清朝の西北辺疆では、いまだ領域の内外という意識は絶対的なものでなく、属人的な関係が重視される場合があったのである（Onuma 2010a: 111-117）。

ところが<sup>54</sup>、1779 年（乾隆 44）に清朝はカザフ内附政策を停止する（小沼 2003: 573）。この理由を張永江は、ジュンガル征服以来の新疆北部の人口希薄が、1771 年のトルグート部の帰順によって解決し、カザフを収容する意義が失われたためと説明する（張 2001: 160-161）。むろんこれは主要な原因の一つに数えられようが、トルグート部の帰順から内附政策の停止まで 8 年を隔てており、原因をそのみに帰することはできない。内附停止の決定は、清－カザフ関係が悪化し、清朝の対外的不干渉の原則が確定した時期になされている。それらはどのような因果関係を持っているのであろうか。本章では、当時の新疆北部の状況をおさえながら、内附政策の停止の背景を明らかにしたい。

#### （1）カザフの越卡事件と卡倫管理体制の改革

先ず、1770 年代の新疆北部における清朝支配体制の拡充について指摘しておきたい。

1771 年に帰順したトルグート部に対し、清朝は新疆北部（一部はホブド）に遊牧地を割り当て、盟旗制（ジャサク旗制）の施行を決定した。1775 年 8 月、盟長・副盟長・ジャサク・協理タイジなどの任官、官印の発給、旗・ニルの編制が完了するに至る<sup>54</sup>。

新疆北部の人口増加の要因はトルグート部の収容ばかりではない。イリでは乾隆 1778 年に、それまで陝西・甘肅から 5 年 1 換で派遣していた緑営兵を、「眷兵」すなわち家族同伴で永住する駐防兵に改めた<sup>55</sup>。従来イリには、満營の惠遠城（1763 年完成）と惠寧城（1766 年完成）、換防の緑営兵が駐屯した綏定城（1762 年完成）と塔勒奇城（1761 年完成）、及び回城の寧遠城（グルジャ、1762 年完成）が存在したが<sup>56</sup>、緑営兵の駐防化決定後、清朝はその駐屯地として広仁城・瞻徳城・

<sup>54</sup> 「滿文録副」2642. 10, 106: 2123-2127, 乾隆 40 年 8 月 26 日 [1775. 9. 20], イレトウの奏摺。

<sup>55</sup> 『高宗実録』巻 1056: 19a-b, 乾隆 43 年 5 月戊辰（9 日）[1778. 6. 3] 条。

拱宸城・熙春城を新築（1780年完成）した<sup>56)</sup>。いわゆる「伊犁九城」の成立である。タルバガタイにおいても、1777年にウルムチからオーロト4ニルを移駐させ守備力の増強を図った<sup>57)</sup>。1778年のカザフ=ニル編制もこの一連の流れの中にある。これらに加え、天山山脈北麓には内地から大量の民人（大半が農民）が入植し<sup>58)</sup>、人口は増加の一途を辿っていた。

このように、清朝は1770年代、特にその後半期に新疆北部の支配体制の拡充を進めた<sup>59)</sup>。そしてその一環として実施されたのが、以下に述べる卡倫の管理体制の改革である。

1777年末、イリ将軍イレトゥは、イリ所属の約20座の卡倫に関する改革案を上奏し、承認された。すなわち、イリ所属の卡倫は外部に通じる経路を管理する役割を持ち、常に厳しく巡察する必要がある。しかし、従来のようにその管轄権がイリ将軍一人に集中していたのでは、卡倫の数が多く、且つそれぞれ相隔たっているため、迅速な対応ができない。そこで各卡倫との距離を考慮して、満洲・ソロン・シベ・チャハル・オーロトの各営に所管の卡倫を割り振り、管轄権を各営領隊大臣に委ねて警備の責を負わせることにした<sup>60)</sup>。

タルバガタイ所属の卡倫については、編纂史料中に記録は見えないが、1778年に改革が実施されている。ただし、タルバガタイの場合は、改革の前段階に卡倫駐留の清兵とカザフ人との交戦という事件が存在した。

この事件は、タルバガタイから東北に走る冬季卡倫<sup>61)</sup>の一つ、ウランブラ (Ma.

56) 『欽定新疆織略』巻4: 8a-16b.

57) 『塔爾巴哈台事宜』巻1: 8b.

58) 華立の試算によると、1780年までに天山以北の農業人口は11万人を超えた（華1995: 79）。

59) この背景として、1775年の大小金川の平定達成という事情を想定できる。大小金川平定後、約10年間は大規模な軍事力の投入を要する反乱は発生せず、辺疆の支配体制の再整備が可能になったと思われる。

60) 『選編』2: 290-291; 『史料』下: 572-573, 乾隆42年11月28日 [1777. 12. 27], イレトゥの奏摺。各営所轄の卡倫の名称や位置については、宝音朝克図2005: 90-127を参照。

61) タルバガタイ城以北の卡倫には、真北に走る夏季卡倫と東北に向かう冬季卡倫が存在し、半年周期で移設された。つまり、清朝は秋に卡倫線を東遷させて冬季卡倫まで下げ、その空いた土地でカザフの越冬を認め、春に再び卡倫線を西側に戻した（佐口1963: 397-407）。

Ulan Bura) 卡倫で発生した。当卡倫に駐留していた兵丁の証言によれば、1778年2月にクトゥシ (Ma. Kutusi) が率いるカザフの一群が現れ、逃走した馬の搜索のため卡内へ入れてくれるよう求めた。卡倫侍衛のオルジュイ (Ma. Oljui) は、卡内に馬が入った形跡がなかったため、要求を認めなかった。するとクトゥシらは別の場所へ移動し、無断で卡内に侵入した。ウランブラカ倫の駐留兵は出向いて彼らを卡外へと駆逐したが、カザフがこれに対抗したため、オルジュイらは弓矢、さらには鳥鎗で応戦した。死者は出なかったものの、カザフはすべて逃げ去り、オルジュイらは彼らが騎乗していた馬10頭を獲た。同日夕刻、クトゥシの兄ジャントゥゲル (Ma. Jangtugel) が到来して弟の誤りを詫び、馬10頭の返還と、この事件をタルバガタイ参贊大臣に報告しないよう懇願した。オルジュイは8頭を返し、残り2頭はクトゥシ自身が来たなら返却することにし、事件の報告を見送ってしまった<sup>62)</sup>。

ところが、5月になり事件が明るみになる。カザフの<sup>タイジ</sup>台吉シャニヤズが、彼の属下であったクトゥシをタルバガタイに派遣し、参贊大臣キングイに行方不明の馬はシャニヤズ自身のものであるとして搜索を要請し、また上述のオルジュイの対応を告訴したのである<sup>63)</sup>。

失馬の搜索要請に対してキングイは、卡内で馬を発見できず、馬が入って来た証拠もないと回答した<sup>64)</sup>。オルジュイについては、タルバガタイ城に召還して尋問をおこなった。この時オルジュイはカザフの駆逐のみを伝え、馬10頭を奪ったことを告げなかった。キングイは特に問題はないと見たのか、尋問後すぐにオルジュイをウランブラカ倫に帰し職務に復帰させた。オルジュイは卡倫到着後、残り2頭の馬をクトゥシに返却したという<sup>65)</sup>。

この報告を受けた乾隆帝は不明な点が多いとして、イリ將軍イレトゥに対し、

62) 「満文録副」2744. 36, 113: 1767-1769, 乾隆43年6月10日 [1778. 7. 3], イレトゥの奏摺。

63) 「満文録副」2739. 40, 113: 601-608, 乾隆43年4月7日 [1778. 5. 3], キングイの奏摺。

64) 同上, 113: 590-609, キングイの奏摺に添付されたシャニヤズ宛文書の満文草稿。

65) 註62, 「満文録副」113: 1767-1770, イレトゥの奏摺。

事実究明のためタルバガタイに赴き徹底的な調査をするよう命じた<sup>66)</sup>。反乱鎮圧以外の理由でイリ將軍が任地を離れるのは極めて異例である。

6月2日にイレトゥはイリを出発したが、一方で侍衛トゥルムンケ (Ma. Turmunke) をアブルフェイズとシャニヤズのもとに派遣していた。イレトゥがタルバガタイに到着して間もなく、トゥルムンケはシャニヤズの息子スユクラを連れて来た。イレトゥはオルジュイの対応と事件の隠匿について非を認めたが、事件の根本的な原因はカザフ側にあるとして、

たとえお前たちカザフが馬を遺失したとしても、足跡はまったく卡倫〔の内側〕に入っていない。しかも力にまかせて無理矢理卡倫に入り、みだりに乱暴に振る舞ったとなれば、〔我々は〕これを必ず処罰する。これをお前たちは帰還した後、アブルフェイズとシャニヤズにありのまま述べ、〔且つ〕彼らには我の命令どおりに汝ら諸カザフにも通曉させるよう伝えよ。このことは、我のもとから我々の諸卡倫にも伝える<sup>67)</sup>。

と述べ、アブルフェイズ・シャニヤズ宛の書簡にもこのことを明記した<sup>68)</sup>。以後、カザフから搜索要求はなされず、この失馬問題は終息を迎えた。

ところが、この問題が決着するのも束の間、新たな事件が発生した。ジメルセク (Ma. Jimersek) 卡倫<sup>69)</sup>の副護軍参領サラン (Ma. Saran) の報告によれば、カザフの一群が卡内に侵入・盤踞し、さらに内遷の構えを見せていた。当卡倫の守備兵だけで駆逐できない規模であったため、タルバガタイ領隊大臣ウダイ (Ma. Udai, 伍岱) が兵丁を率いて駆逐に向かった。この話を耳にしたカザフたちは、ウダイの到着前にすべて卡外に遁走していたが、ウダイはサランらに兵80名を委ねて卡倫沿いの土地を搜索させ、またそれとは別にウリヤスト卡倫に

<sup>66)</sup> 同上、「滿文録副」113: 1766、イレトゥの奏摺に引用された上諭（日付不明）。

<sup>67)</sup> 「滿文録副」2746. 23, 113: 2349-2350、乾隆43年閏6月2日 [1778. 7. 25]、イレトゥの奏摺。

<sup>68)</sup> 「滿文録副」2747. 9, 113: 2442-2436、乾隆43年閏6月1日 [1778. 7. 24]、イレトゥの奏摺に添付されたアブルフェイズ・シャニヤズ宛文書の滿文草稿。

<sup>69)</sup> ジメルセク卡倫は、「乾隆内府輿図」（別名「乾隆十三排図」）にタルバガタイから二つめの夏季卡倫として描かれているが、『欽定新疆識略』など19世紀前半編纂の地方志類には見られない。



兵丁を派遣し、隠れ住んでいた他のカザフを駆逐した。報告を受けたキングイは、ウダイにさらなる徹底的な搜索を命じた<sup>(70)</sup>。

ここで注目すべきは、上記の内容に関する奏摺が起草された乾隆 43 年 8 月 22 日 (1778. 10. 12) に、イレトゥとキングイが連名の別の奏摺で、タルバガタイ城以北の卡倫の巡察制度の改変を上奏したことである。それまでは、降雪時期の 9 月 (旧暦) までに夏季卡倫から冬季卡倫への移設を実施し、この際にタルバガタイ城から領隊大臣を派出して卡倫線を巡察させていた。その後、両卡倫線間の空いた土地にカザフが移動し冬営を開始すると、またタルバガタイ城から侍衛や官員を兵丁とともに派遣し、馬税の徴収<sup>(71)</sup>にあたらせていた。これに対してイレトゥとキングイは、今後は先に馬税徴収の官兵を派遣し、その後で領隊大臣の卡倫巡察を実施すべきであると上奏したのである<sup>(72)</sup>。それは次のような理由によるものであった。

〔巡察に行った〕この領隊大臣は卡倫を調査して急いで帰ってくる必要はない。落ち着いてゆっくりと進み、貢賦を徴収する侍衛や官員がカザフから貢賦を徴収し終わった後に帰って来させたい。こうすれば、もしも侍衛がその時にカザフの牧地で事件を起こしても、領隊大臣が卡倫を調査していてカザフの牧地の周辺にいたので、〔事件を〕調査し対応するのに都合がよい。且つカザフから貢賦を徴収する時に、もしもカザフが抵抗して出し渋ったりしたならば、侍衛や官員は〔距離の〕近さを考えて、領隊大臣のもとに問い合わせ、〔領隊大臣が〕彼らに指示すれば、諸事に有益である。さらに、このようであれば、我々の領隊大臣が卡倫を巡察して近くにいることをカザフが耳にし、いささか畏怖すると考える<sup>(73)</sup>。

制度改変の目的は、カザフとの間に事件が発生した場合、官兵が領隊大臣の指

(70) 「満文録副」2756. 19, 114: 1198-1203, 乾隆 43 年 8 月 22 日 [1778. 10. 12], イレトゥの満文奏摺。

(71) カザフがこの一帯で越冬するためには、家畜 100 頭につき 1 頭を清朝に納める必要があった。

(72) 「満文録副」2756. 18, 114: 1194-1296, 乾隆 43 年 8 月 22 日 [1778. 10. 12], イレトゥ・キングイの満文奏摺。

(73) 同上, 「満文録副」114: 1196, イレトゥ・キングイの満文奏摺。

示を仰ぎ、迅速に対応するためであった。奏摺内に明記されていないとはいえ、この提案がイレトゥとキングイの協議のもと、カザフ越カ事件の報告と同日になされたことを考慮すれば、カ倫線を挟んで発生した一連の事件が制度改変の動機であったことは明白であろう。

以上のような過程を経て、カ倫は清朝の辺疆防衛上さらに重要な存在と見なされるようになり、カ倫線の内と外という領域意識は高まっていったと考えられる。この点をふまえ、以下では清朝がカザフ内附政策を停止するまでの経緯を検討する。

## (2) カザフ内附政策の停止

1761年以降、清朝は内附を求めるカザフがいれば、収容してタルバガタイ西南のバルルクの地に安置した。大規模な集団的移住はなかったようだが、個人・家族単位の移住が断続的に続き、1778年には人口増加も鑑みてニルが編制されるに至る（小沼 2003: 571-572）。

ただし、この内附容認の期間においても、トルグート部の帰還以降、清朝の受入姿勢に変化が生じている。よく知られているように、カザフ草原横断時にトルグート部はカザフの襲撃に遭い、多くの死者・脱落者を出していた。他方、清朝領内に収容されたトルグート部の中にはカザフ人が紛れ込んでいた。清朝はこの点を承知していたが、敢えて問題視しなかった。ところが、1773年にアブライが、カザフの中にいるトルグート人と、清朝領内のトルグート部の中にいるカザフ人の交換を提案してきた。乾隆帝は、たとえカザフに略奪されたトルグート人が多くいたとしても、それは清朝領内に入る前の出来事であり、ここでむやみに交換すれば混乱が生じると判断し、交換要求を拒否した<sup>74)</sup>。

しかし実際には、カザフ草原に取り残されたトルグート人が逃走してきた場合、清朝はそれを受け入れている。また、カザフ首長層がトルグート人を清朝側に引き渡した事例も見られた。1775年にタルバガタイに到来したボブは、ト

<sup>74)</sup> 「満文寄信檔」134 (1)、乾隆 38 年 10 月 29 日 [1773. 12. 12] 条（上諭の日付は前日の 28 日）；『高宗実録』巻 945, 29a-30a, 乾隆 38 年 10 月癸丑（28 日）条。

ルグート部王公のツェベクドルジの旧属下であり、カザフの捕虜となっていたトルグート人のネイテル (Ma. Neiter) を連れてきた。清朝は、ネイテルに詳しい尋問することなく、ツェベクドルジの牧地に居住を認めた<sup>(75)</sup>。また同年、アブルフェイズが以前清朝に送還したオイラトの女の返還を求めた際、イレトゥはアブルフェイズ宛の書簡の中で、

カザフから〔内附を〕求めて出てきたトルグート人らは、すべてそれぞれの牧地に送って、所属のタイジらに委ねて住まわせている。送り返す例規はない<sup>(76)</sup>。

と述べ、一度収容したトルグート人は送り返さなかった。

一方、この動きに相反して、清朝が次第にカザフの受け入れに消極的になっていく傾向が見られる。1775年、キングイは、カザフのドホロク (Ma. Doholok) と妻・子の三人を二度にわたり駆逐し、且つ彼らがイリに向かう可能性を考え、三人の容貌を記した文書をイリに送付した。果たして名前を詐称してイリに現れた彼らは正体を看破され追放された<sup>(77)</sup>。清朝側の姿勢は硬化しており、既にバルルクに親戚がいて素性が明らかでもない限り、内附を容認しなかった<sup>(78)</sup>。この傾向は、1778年のニル編制後、より具体的な形となって現れる。

1779年初頭、ムセブ (Ma. Museb, 穆色布) に率いられたアクナイマン=オトクのカザフ人約100名がタルバガタイに到来し、内附を求めた。これまでにない規模であったため、キングイは乾隆帝に判断を仰いだ。乾隆帝は、カザフ草原で「盗みや欺瞞」が横行しているので、治安がよく且つ貢賦・家畜を徴収されない<sup>(79)</sup>清朝領内への移住を望むカザフが増えていると考えていた。前年に多発したカザフの越卡も想起しての見解であろう。また、「盗みや欺瞞」の発生原因

(75) 「満文録副」2635. 3, 106: 724, 乾隆40年6月2日 [1775. 6. 29], キングイ等の奏摺。

(76) 「満文録副」2636. 13, 106: 982-994, 乾隆40年6月15日 [1775. 7. 12], イレトゥの奏摺に添付されたアブルフェイズ宛文書の満文草稿。

(77) 「満文録副」2643. 39, 106: 2453-2470, 乾隆40年8月12日 [1775. 9. 6], キングイ等の奏摺。

(78) 「満文録副」2626. 20, 105: 2535-2541, 乾隆40年3月29日 [1775. 4. 28], キングイの奏摺。

(79) 清朝は内附したカザフに対して軍役・貢納の義務を免除していた (小沼 2003: 570-571)。

について、イレトゥは、絶え間ないカザフとクルグズの戦争による家畜の減少にあると見ている<sup>(80)</sup>。最終的に乾隆帝は次のような判断を下した。

アブライ・アブルフェイズから下々のカザフに至るまで、みな我のアルバトであるぞ。外にしようが、内にしようが、そもそも区別はない。そうはいえ、ムセブたちのように100余人で来帰したのを見て、すすんで収容してしまったら、以後〔来帰者が増加して〕我々の土地は占領されるに至り、また〔イリ周辺の〕人は次第に多くなっているの、諸事に有益でない。ましてや、彼らの〔ような〕人がしきりに来帰し、我々が来たのを見てすぐに収容すれば、アブライたちもどうして〔それを〕望もうか。我が思うに、彼らを留めないことを我々の口から言い出すよりは、イレトゥに命じてアブライ・アブルフェイズに、このような人々が来帰したのを見て収容したら彼らに有益であるかについて書簡を送って尋ねれば、アブライは必ず彼らにとって有益でないと返書を寄こして来るであろう。〔そうすれば、〕我々はアブライの言葉を以て、以後さらなる来帰者を、顔色を顧みずにすべて追い返せばよい<sup>(81)</sup>。

乾隆帝はカ倫の内外の各勢力を区別なく自らの「アルバト」と認めている矛盾を認識していた。このままカザフの内附を容認し続ければ、新疆北部の牧地の占領や現地住民とのトラブル発生が危惧される。とはいえ、一方的に内附停止を宣言すれば、関係が悪化していたカザフとの間にさらなる摩擦が生じかねない。そこで乾隆帝は、先ずアブライとアブルフェイズから言質を取り、それを盾にして内附希望者を退けようとしたのである。この命令を受けてイレトゥがアブライとアブルフェイズに送付した書簡は以下のとおりである。

伊犁等処総統將軍、領侍衛内大臣、尚書〔のイレトゥ〕が、カザフ＝ハンのアブライと王のアブルフェイズに呈した。ハン・王よ、汝らの身体は安寧か。牧地はあまねく安寧か。先ごろ、我々のタルバガタイ参贊大臣のもと

(80) 「満文録副」2781. 23, 115: 2869-2870, 乾隆44年4月5日[1779. 5. 20], イレトゥの奏摺。なお、1778年にクルグズの一部が清朝領内への移住を要請したが、清朝はカザフとの対立などを理由に拒否している。『高宗実録』巻1059: 8b-10a, 乾隆43年6月丁未(19日)[1778. 7. 12]条。

(81) 「満文寄信檔」乾隆44年正月16日[1779. 3. 3]条。

から、汝らのアクナイマン=オトクのカザフ人ムセブとハルマス、彼らの一族約 100 名が、大エジェンのアルバトとなり、内附して住みたいと請うたことに関して書信が送られてきた。汝らカザフはみな大エジェンのアルバトである。汝らの地にしようが、来帰して我々の卡内にしようが、どちらも同じである。〔内附は〕決して不可ではないので、これまで一・二人の来帰者ならばみな収容して住まわせていていた。しかし、いまムセブら約 100 名が来帰したのを見るに、続いてこのように来帰する者が必ず増えるだろう。我々は、彼らが来帰し、我々の地に居住する者が増えたら、汝らにとってまったく有益でないと考える。しかし、彼らが我々の地に来帰して住んだ場合、結局汝らにとって有益であるか否かを知らないのです、大エジェンの汝らを受し慈しむ心に沿うべく、我は汝らに書簡を与えて尋ねに行かせるのだ。彼らが来帰して我々の地に住んだ場合、汝らにとって結局有益であるか否かについて、急ぎ我に書簡を送って来るように。もしも汝らに無益ならば、我々の側からは〔カザフを〕収容しないようにしたい。このために呈した<sup>82)</sup>。

乾隆帝の意向に沿い、内附継続が清朝に不都合であることには触れず、またアブライたちから内附禁止の言質を引き出すべく巧妙な論調で書かれていることがわかる。

翌年アブライは返書をイリに送付し、清朝の提案を受入れ、アクナイマンの部民の受入拒否に感謝し、それらを追い返してもカザフ側は何ら不利益を被らないと返答した<sup>83)</sup>。清朝は目論見どおり内附禁止の言質を得ることに成功したのである。また実際に、新たな内附希望者に対してアブライの返書を根拠に彼

82) 「満文録副」2781. 23, 115: 2863-2865, 乾隆 44 年 4 月 5 日 [1779. 5. 20], イレトウの奏摺に添付されたアブライ・アブルフェイズ宛文書の満文草稿。

83) 「満文録副」2800. 5. 2, 117: 168-169, 乾隆 44 年 9 月包; Noda and Onuma 2010: 38-42 (Document G).

84) 1779 年 9 月にカザフのハイブ (Ma. Haiib) から家族三人が内附を求めた際、キングイは「先ごろ汝らのハンたちのもとから、内附を請うカザフらを収容しないよう、我々に請う書簡が呈された。いまや汝らを収容することはできない。」と述べ、彼らを卡倫から放逐している。「満文録副」2797. 34, 116: 3255-3260, 乾隆 44 年 8 月 20 日 [1779. 9. 29], キングイ等の奏摺。

らを駆逐した事例を確認できる<sup>84)</sup>。

かくして清朝のカザフ内附政策は停止された。その直接的理由は、新疆北部の人口増加とカザフ内附希望者の増加にあったが、その政策変更の背景には当時の清－カザフ関係の悪化、カザフとクルグズの対立といった、本稿で明らかにしたカザフ草原をめぐる混迷した情勢が存在していた。内附政策の停止は、同時期に固まった清朝の中央アジア諸勢力への不干渉の原則と表裏一体をなすものと見なせよう。

## お わ り に

1770年代に入り、新疆北部の政治的・社会的構図は著しく変化した。1771年のトルグート部の帰順以降、清朝は支配体制の拡充を進め、希薄であった人口は着実に増加していった。その一方、清朝とカザフの関係は悪化の一途を辿る。アブライのタシケント献納問題と度重なる援兵要請により、入覲使節の派遣は幾度も中断した。また、当時のカザフ草原では内外に対立構造が形成され、その影響は新疆北部にも及び、清朝は対応に苦慮した。かかる趨勢の中、清朝の中央アジア諸勢力に対する不干渉の原則が確定していく。19世紀前半のロシアのカザフ併合に対する清朝の黙認は、この延長線上に位置しているのである。

また、支配体制の拡充の一環として、清朝は1777-78年に卡倫の管理体制の改革をおこなった。カザフの越卡事件の発生と相俟って卡倫の存在意義が高まるにしたがい、卡倫線の内外を区別する領域意識と、その内外に連続する属人的な「エジェン－アルバト」関係が併存する矛盾が顕著となり、最終的に清朝はカザフ内附問題をめぐる議論の中で前者をより重視する方向に梶を切り、1779年に内附政策を停止した。清朝の「属地主義」の意識が「属人主義」の概念を凌駕<sup>85)</sup>した瞬間であり<sup>86)</sup>、ジューンガル征服以降、曖昧さ——それは清朝支

<sup>85)</sup> このような変化は、1781年のハルハ部西三盟界の画定(岡1988:21-24)と連動していると考ええる。

<sup>86)</sup> ただし、少なくとも嘉慶初頭(18世紀末)までは清－カザフ関係の中で、「エジェン－アルバト」関係は理念として維持されていた(華2008:187-188)。

配の「柔軟さ」でもある——を内在していた清朝の西北辺疆は、ここに閉じられていく。

乾隆中期にあたるこの時代は、まさに「盛世」の真ただ中にあたる。清朝政権はそれまでの軍事的成果を称揚すべく、文化事業（絵画・建築・書物・宗教・儀礼など）の諸側面に軍事的・帝國的テーマを注入し、「文化の軍事主義化」（militarization of culture）という「文化の鋳直し」を推進していた（Waley-Cohen 2006: xi-xii, 21-22）。本稿で検討した諸問題は、その「鋳直し」によって編纂された史料からはほとんど窺えない、清朝の一遇で生じていた些細な事象かもしれないが、「ボックス=マンチュリカ」とも称される華やかな時代の背後で進んでいた、王朝体制の変質を如実に反映していると考ええる。

1779 年末、ジョチがイレトゥに送付した書簡の包み紙にロシア文が書かれており物議を醸した。しかもその内容は、アブルフェイズがボブをトボリスクに派遣したいという請願に対する、ロシア皇帝の返書であった<sup>(87)</sup>。ロシアの影響力の高まりが窺えるが、清朝はロシアを警戒するのではなく、カザフを「性情が安定せず」且つ「二心あり」と非難するに終始した<sup>(88)</sup>。1780 年代前半には、アブライ（d. 1781）やアブルフェイズ（d. 1783）といった、清朝と密接な関係を持った第一世代の首長層が相次いで世を去る。カザフ草原に新たな局面が訪れた時、それに対処できる術を清朝は持ち得ていなかったのである。

史料・文献

#### 1. 文書・未刊史料

「満文録副」：「軍機処満文録副奏摺」，中国第一歴史檔案館。

「満文寄信檔」：「軍機処満文寄信檔」，中国第一歴史檔案館。

「哈薩克名冊」：「哈薩克名冊 乾隆年間」，中国第一歴史檔案館。

(87) 「満文録副」2805. 3, 117: 1194-1199, 乾隆 44 年 10 月 6 日 [1779. 11. 13]，イレトゥの奏摺。ボブとロシアとの結びつきについては，Noda and Onuma 2010: 81-85 (Document P) を参照。

(88) 「満文録副」2809. 2, 117: 2022-2026, 乾隆 44 年 11 月 24 日 [1779. 12. 31]，イレトゥの奏摺に引用された乾隆 44 年 11 月 2 日 (1779. 12. 9) の上諭。

## 2. 編纂・公刊史料

『欽定皇輿西域圖志』52卷，傅恒等奉敕撰，乾隆47年（1782）→台北：台灣商務印書館，1986。

『塔爾巴哈台事宜』4卷，永保・興肇撰，嘉慶10年（1805）→台北：成文出版社，1969。

『大清高宗純（乾隆）皇帝實錄』1500卷，慶桂等奉敕撰，嘉慶12年（1807）→台北：華文書局，1964。

『欽定新疆識略』12卷，松筠等奉敕撰，道光元年（1821）→台北：文海出版社，1965。

『選編』1・2：中国第一歷史檔案館選編『清代錫伯族檔案史料選編』（*Cing gurun i dangse ci sonjome banjibuha sibe i suduri mutun*）1・2，新疆人民出版社，1987。

『史料』上・下：中国第一歷史檔案館編訳『錫伯族檔案史料』上冊・下冊，遼寧民族出版社，1989。

KRO: *Kazakhsko-russkie otnosheniia v XVI-XVIII vekakh: sbornik dokumentov i materialov*. Alma-Ata: Izdatel'stvo Akademii nauk Kazakhskoi SSR, 1961.

## 3. 参考文献

阿拉騰奧其爾・吳元豐 1998. 「清廷冊封瓦里蘇勒坦為哈薩克中帳汗始末——兼述瓦里汗陸俄及其緣由」『中国边疆史地研究』3（1998）：52-58。

宝音朝克图 2005. 『清代北部边疆卡倫研究』北京：中国人民大学出版社。

Di Cosmo, Nicola. 2003. "Kirghiz Nomads on the Qing Frontier: Tribute, Trade, or Gift-Exchange?" In N. Di Cosmo and Don J. Wyatt eds., *Political Frontiers, Ethnic Boundaries and Human Geographies in Chinese History*, 351-372. London: Routledge Curzon.

Gurevich, Boris. 1979. *Mezhdunarodnye otnosheniia v Tsentral'noi Azii v XVII - pervoi polovine XIX v.* Moskva: Izdatel'stvo Nauka, Glavnaia redaktsiia vostochnoi literatury.

堀直 1995. 「草原の道」歴史学研究会編『世界史とは何か——多元的世界の接触の転機』，285-311，東京：東京大学出版会。

華立 1995. 『清代新疆農業開發史』海爾濱：黑龍江教育出版社。

——— 2006. 「嘉慶四—五年哈薩克王位承襲問題与清廷的対応方針」故宮博物院・国家



- 清史編纂委員會編『故宮博物院八十華誕暨國際清史學術研討會論文集』, 181-192, 北京: 紫禁城出版社。
- Jarring, Gunnar. 1964. *An Eastern Turki-English Dialect Dictionary*. Lund: C. W. K. Gleerup.
- Khafizova, Klara. 1995. *Kitaishkaia diplomatiia v Tsentral'noi Azii: XIV-XIX vv.* Almaty: Gylm.
- 厲声 2003. 「清王朝西北藩屬哈薩克治理政策研究」『西北民族論叢』2: 185-213, 北京: 中国社会科学出版社。
- 2004. 『哈薩克斯坦及其与中国新疆的關係 (15 世紀—20 世紀中葉)』海爾濱: 黑龍江教育出版社。
- 林永匡・王熹 1991. 『清代西北民族貿易史』北京: 中央民族学院出版社。
- 馬汝衍・馬大正 1991. 『漂落異域的民族——17 至 18 世紀的土爾扈特蒙古』北京: 中国社会科学出版社。
- Millward, James. 1992. “Qing Silk-Horse Trade with the Qazaqs in Yili and Tarbaghatai, 1758-1853.” *Central and Inner Asian Studies* 7: 1-42.
- 2004. “Qing Inner Asian Empire and the Return of the Torghuts.” In James A. Millward, Ruth W. Dunnell, Mark C. Elliott, and Philippe Forêt eds., *New Qing Imperial History: the Making of Inner Asian Empire at Qing Chengde*, 91-105. London: Routledge Curzon.
- 宮脇淳子 1991. 「トルグート部の発展——17～18 世紀中央ユーラシアの遊牧王権」『アジア・アフリカ言語文化研究』42: 71-104.
- Newby, Laura. 2005. *The Empire and the Khanate: a Political History of Qing Relations with Khoqand c. 1760-1860*. Leiden and Boston: Brill.
- 野田仁 2002. 「清朝史料上のハザク (カザフ) 三「部」」『満族史研究』1: 16-30.
- 2005. 「露清の狭間のカザフ・ハーン国——スルタンと清朝の關係を中心に」『東洋学報』87 (2): 29-59.
- 2006. 「清朝によるカザフへの爵位授与——グバイドゥツラの汗爵辭退の事例 (1824 年) をを中心に——」『内陸アジア史研究』21: 33-56.
- 2007. 「カザフ・ハーン国とトルキスタン——遊牧民の君主埋葬と墓廟崇拝から

- の考察——』『イスラム世界』68: 1-24.
- 2010. “An Essay on the Title of Kazakh Sultans in the Qing Archival Document.” In Noda and Onuma 2010: 126-151
- Noda Jin and Onuma Takahiro. 2010. *A Collection of Documents from the Kazakh Sultans to the Qing Dynasty*. Joint Usage / Research Center for Islamic Area Studies, *Central Eurasian Research Series*, Special Issue 1. Tokyo: Department of Islamic Area Studies, Center for Evolving Humanities, Graduate School of Humanities and Sociology, the University of Tokyo.
- 岡洋樹 1988. 「ハルハ・モンゴルにおける清朝の盟旗制支配の成立過程——牧地の問題を中心として——」『史学雑誌』97 (2): 1-32.
- 小沼孝博 2001. 「19 世紀前半「西北辺疆」における清朝の領域とその収縮」『内陸アジア史研究』16: 61-76.
- 2003. 「論清代唯一的哈薩克牛录之編設及其意義」朱誠如主編『清史論集——慶祝王鍾翰教授九十華誕學術論文集』北京：紫禁城出版社，568-575.
- 2006. 「清朝とカザフ遊牧勢力との政治的關係に関する一考察——中央アジアにおける「エジェン・アルバト」關係の敷衍と展開」『アジア・アフリカ言語文化研究』72: 39-63.
- 2010a. “Political Relations between the Qing Dynasty and Kazakh Nomads in the Mid-18th Century: Promotion of the ‘*ejen-albatu* relationship’ in Central Asia.” In Noda and Onuma 2010: 86-125.
- 2010b. “Kazakh Missions to the Qing Court.” In Noda and Onuma 2010: 151-159.
- 佐口透 1963. 『18-19 世紀東トルキスタン社会史研究』東京：吉川弘文館.
- 1986. 『新疆民族史研究』東京：吉川弘文館.
- Valikhanov, Chokan. 1985. “Ablai.” In *Sobranie sochinenii v piati tomakh*, t. 4, 111-116. Alma-Ata: Glavnaia redaktsiia Kazakhskoi sovetskoi Entsiklopedii.
- Waley-Cohen, Joanna. 2006. *The Culture of War in China: Empire and the Military under the Qing Dynasty*. London and New York: L. B. Tauris, 2006.
- 張永江 2001. 『清代藩部研究——以政治變遷為中心』哈爾濱：黑龍江教育出版社.

【付記】 本稿は平成 21 年度文部科学省科学研究費（若手研究スタートアップ）による研究成果の一部である。

this way the appearance of *cakravartin* in various states of Central Asia in the 10<sup>th</sup> century is a shared phenomenon.

We can suppose a link between the emergence of the *cakravartin* and the decline and destruction of the Tang Empire. The collapse of the Tang enlivened autonomous movements both politically and economically in the surrounding world. In addition, in consideration of the fact that each of the new states established in the eastern Eurasia from the 9<sup>th</sup> to the 11<sup>th</sup> century was a Buddhist state, it can be said that the view of the *cakravartin* spread to the surrounding world with the collapse of the Tang dynasty and contributed to the establishment of monarchies in several states of Central Asia including that of Dunhuang.

## **RELATIONS BETWEEN THE QING DYNASTY AND KAZAKHS IN THE 1770S: THE CLOSING OF THE NORTHWESTERN BORDER OF THE QING DYNASTY**

ONUMA Takahiro

The aim of this article is to closely examine the various problems that arose in the 1770s between the Qing dynasty and the Kazakhs and elucidate changes in Qing policy in the process of responding to the Kazakhs. As evidence, I have chiefly relied on Manchu documents, but have also employed Turkic (Chaghatay) documents sent to the Qing by the Kazakh sultans.

After the Kazakh “submission” in 1757, the Qing dynasty received tribute missions on a nearly annual basis. However, by the 1770s a series of events had occurred, such as the “submission” of the Torghuts, repeated requests from the Kazakh for military assistance, and worries over Kazakh forgeries of imperial edicts; as a result, Kazakh tribute missions were frequently suspended. The Qing dynasty received tribute missions from the Kazakhs on only four occasions in the decade, including the embassy that arrived in 1780, indicating the worsening of relations between the Qing dynasty and the Kazakhs.

From around 1775, fighting between the Kazakhs and Kirghiz on the southern Kazakh steppe intensified and internal fighting among the Kazakhs over rule of the town of Turkistan broke out. Kazakh chieftains requested the Qing administrators of Yili and Tarbaghatai for intervention and resolution of these problems. The Qing dynasty, which had been at a loss over how to respond, indicated directly a policy

of nonintervention in the Kazakh internal affairs, and that policy thereafter became fixed as the guiding principle of Qing policy toward Central Asia. The Qing principle of nonintervention in foreign matters led to acquiescence to the Russian swallowing up of the Kazakhs in the first half of the 19th century and invited the ill will and alienation of the Kazakh chieftains was cemented in amidst the turmoil of the Qing-Kazakh relations of the 1770s.

In the decade of the 1770s, the system of rule in the northern Xinjiang spread more widely, and the population, which had been sparsely distributed, began to steadily increase. Amidst these changes, the Qing dynasty undertook a reform of the *karun* (guard post) system from 1777-78. The Qing dynasty granted the formal request of the Kazakhs who were the “*albatu*” of the Qing emperor to move their homes within the Qing boundary (within the *karun* line) from 1766 until 1778. However, in 1778 an incident of Kazakh trespassing inside the *karun* line occurred, and as consciousness of the existence of the *karun* line rose, the coexistence of a contradiction between a sense of territoriality, determined by whether one was either within or without the *karun* line, and individual links that knew no such boundaries, i.e., the *ejen-albatu* relationship, became striking. As a result the Qing began to steer its policy in the direction of favoring the former and ceased its policy of incorporating the Kazakhs. In the northwest borderlands of the Qing the consciousness of the “territorial principle” eclipsed the conception of a “personal principle.”

Amidst the turmoil that raged between the Qing and the Kazakhs in the 1770s, the northwestern borderlands of the Qing, in which the ambiguity (which might even be termed flexibility) had prevailed since the Junghar campaign, were closed. The dropping of the policy of incorporating the Kazakhs in 1779 reflected the changes in the system of imperial rule, which faithfully proceeded during the flourishing period that might be termed “Pax Manchurica.”